

円地文子『小町変相』論

——「美女」の人生に対する一考察——

赤城 知美*

〔論文要旨〕

日本近現代文学では「老人文学」と言われるジャンルにおいて、老いと性の問題が描かれ続けてきた。女性作家として、この問題に正面から向き合ったのが円地文子である。円地は「老女もの」と言われる作品を多く残した。その中でも、『小町変相』は「小町」の伝説を下敷きしながら、生涯独身を貫いた美人女優、後宮麗子を主人公に据えているという点で、他の「老女もの」と比べて特異な存在である。

本稿では、まず『小町変相』の登場人物が抱える「美しさ」「ゆえの苦悩」に注目する。その苦悩の背景には、「美」||「若さ」という男性的価値観が内在化されていること、「見られる性」「産む性」としての社会的抑圧が潜んでいることに触れた。また、肉体的な衰えという問題に直面する主人公が、性的な欲求を満たすための手段として「憑霊的な力」が導入されていることを明らかにした。そして、これまで先行研究において、あまり触れられてこなかった信楽夫人にも注目した。夫人が記したとされる「小町私見」によれば、小町伝説の背景には、美貌の女性の悲哀とともに、それを追いかける男性の心理も分析されている。この分析の上で、夫人は麗子に魅入られた夫とその対象である麗子にも同情を示していた。この信楽夫人の存在によって、麗子や信楽の人間性が深められていくと論じた。

キーワード…小野小町 老い 性愛

* あかぎ ともみ 人文社会科学研究所 博士後期課程 日本アジア文化専攻

はじめに

日本近現代文学において老人文学といえ、川端康成の「山の音」（昭和二十四年九月―昭和二十九年四月）、「眠れる美女」（『新潮』昭和三十五年一月―昭和三十六年一月）や谷崎潤一郎の「瘋癲老人日記」（『中央公論』昭和三十六年十一月―昭和三十七年五月）などが思い浮かぶ。これらの作品では、男性である作家自身の老いとともに主人公も年を重ねていた。また、それに伴う肉体の衰えや死の不安だけでなく、老齡ゆえの性的問題が取り上げられていた。主人公たちは、老いの中で変化していく肉体と変化しない欲望に折り合いをつけるために悪戦苦闘しながらも、自己のセクシュアリティを肯定し、性的な欲望とともに残された人生を生き抜いていた。

一方、女性の立場から性を追求したのが円地文子である。円地といえ、家父長制のもとで抑圧された女性の生きざまを描き、センセーショナルな性描写も含め、「女の業」や「女の執念」を描いた作家と見なされてきた。それは円地自身も自認するところであり、円地にとって女の人生や性的問題を描くことが生涯のテーマであったことは確かである。

円地も男性作家同様に、自身の老いとともに主人公にも年を重ねさせていった。小笠原美子によれば、「妖」（『中央公論』昭和三十一年九月）が「老い」をテーマにした最初の作品であるという。ここから出発する「老女もの」と呼ばれる作品群の主人公は、癌の既往歴や職業が円地自身を彷彿とさせる。その中で、女優であり生涯独身を貫き通した後宮麗子が主人公である『小町変相』（講談社、昭和四十年五月）は、特異な設定と言える。この特異な主人公の設定を通して、円地が何を表現したかったの

か本稿において考察していくこととする。

一 作中論文「小野小町についての私見」

『小町変相』の根幹とも言える作中論文「小野小町についての私見」（以下「私見」と記す）は、「あなめ伝説」や「卒都婆小町」のように小野小町に関する晩年の零落物語が発生した理由を分析している。細川涼一は「中世は家父長制社会が成立した時代」であり、「母性機能を発揮しない未婚女性に対する男性の立場からの女性蔑視」があり、母性の「規範から逸脱した女性の末路」を哀れに描いたのが小町落魄説話であるという⁽¹⁾。長年、女性の生きざまを題材にしてきた円地にとって、小町伝説が興味を引くテーマであったことは理解できる。実際、単行本の「あとがき」には、「この作品の主題は四五年来、意中になつた」と記されている。

また、全集に収められている『小町変相』の「後記」には「この作品の考証について前田善子氏著『小野小町』に多くのことを教えられました」と書かれ、感謝が述べられている。前田善子の『小野小町』は昭和十八年に出版されている。「私見」に記されている小町の解釈の多くは、前田の考えに類似しているもの、円地が前田の『小野小町』をいつ手に取ったのかについては、明らかではない。だが、小町伝説に興味を持っていた円地にとって前田の本が小説の創作に大きな影響を及ぼしたことは間違いない。前田も円地も小町伝説に対して、生涯独身を貫く女性の不遇な末路を女性の独立性が認められない時代ゆえの宿命と捉えている。その中でも、円地特有の理論に当たるのが次の

箇所である。

小町の晩年の悲惨な放浪生活を語る者は常に男性であって、彼らの中には家を持たぬ美女、夫や子を持たぬ美女に対する恐怖心の入り交じったあくどい憎悪が貯えられているように思う。

由来、男の内には女に対する無限な恐怖心が潜在しているのであるが、それは女が家婦となることによつて、その通力を失つたような錯覚を持つものであるらしい。(第三章 小町私見)

つまり、円地は残酷な小町伝説を通して、男性に潜在する性役割に基づく女性への差別意識を明らかにしている。この点にのみ着目すれば、円地なりのジェンダー論を『小町変相』において披露したことになる。

ゆのまえ知子は「小町伝説」について「美女落魄の典型とされてきたが、同時にエイジズム思想の原型でもある」と、長年語り継がれてきた伝説に隠された女性差別に光を当てたことを円地の功績と指摘する(2)。また有元伸子は、この「私見」に触れ、「小町説話の発生と享受をジェンダーの視点によつて考察する点で、大きな成果を上げており、日本におけるフェミニズム批評のかなり早い時期における達成だと言つても過言ではあるまい」と高く評価する(3)。

これらの指摘に代表されるように、『小町変相』の先行研究の多くは、この「私見」に記されたジェンダー論を高く評価している。先に述べた通り、小町伝説はフェミニズム批評やジェンダーの観点からの考察が十分可能である。その小町伝説を下敷き

にした『小町変相』が女性研究者の関心を引き、ジェンダー研究の対象となされてきたのは当然の結果である。

その一方で、「私見」のジェンダー論が作品全体にどのような影響し、麗子の人生にどう反映されたのかについては触れられてはいない。管見によれば、須浪敏子が「女一般が結婚し子どもを産むことで自己のアイデンティティを確認した時代のドグマから、大物女優の麗子さえ逃れがたかった」と、麗子の苦悩の因をジェンダー規範によるものとし、それに対する敗北を指摘しているのみである(4)。

だが、麗子の苦悩や葛藤のありかを探れば、それがジェンダー規範に限らず、美に対する執着を基にしているとも考えられる。麗子の苦悩は常に「若い美しい役が演じられぬ」「美しいと見物に思いこませることが」できなくなるといふ、「美しい女優」としての地位が老いによつて奪われていくことにある。

改めて、先の「私見」の引用箇所注目すれば「家を持たぬ美女、夫や子を持たぬ美女」と男性の憎悪の対象は、美貌の女性に限定されていることに気付く。すると、この『小町変相』全体が「美しさ」ゆえの苦悩をテーマにしていることが明らかになるだろう。本稿においては、小町小町という日本を代表する「美女」伝説を下敷きにした『小町変相』に対して、「麗子」といふ「美女」の苦悩の背景に潜むものに光を当てていく。

また、「私見」の筆者が「家婦」の代表とも言える信楽の妻とされていることも考察せねばならない問題である。信楽の妻は、なぜ夫を魅了し、左遷の憂き目に遭わせた後宮麗子と重なる「小町小町」に対して「思いやりのある言葉」を述べているのか。この点については、四節で分析を試みる。

二節以下では、美貌の女性の苦悩の原因に焦点を当て、考察

を行う。

二 後宮麗子

「美しい」人間は、恵まれていている。容姿端麗であることは、異性の目を引き、愛される可能性を増す。一般的には、そのように考えられている。そのため、「美しい」がゆえの苦しみを理解することは、「美しさ」をもち得ない人間には困難である。

だが、「美しさ」は人を魅了する一方で、苦しみを与えることもある。東畑開人は著書の中で「美を病む」という言葉を「美しさや醜さに囚われて、あるいは圧倒されて、自らが生の苦しみに苛まれること」と定義している(5)。

この観点から考察するならば、「美しさ」に囚われ、それゆえに苦悩の渦に飲まれてしまったのが後宮麗子であると言えるのではないだろうか。

「美しさ」とは、そもそも基準があるものではなく、主観的なものである。だが、美人女優といわれるような人物は、大衆から美的な存在と認定されていることになる。そのような人物にも、加齢は必ず訪れ、「若さ」という表面的な美しさを奪い去っていく。

豪華な三面鏡の前で、自分の姿を映す麗子は、顔や首の「頰塵」を直視し、自身の老いを実感する。そして、「美しい女優」であり続けることがこの先困難になることを予感する。男性を「見る性」、女性を「見られる性」と区別した場合、麗子は「見られる性」として今まで当たり前のよう男性から羨望や好意のままなざしを向けられてきた。だが、加齢による容貌の衰えによって、その優越感が麗子から奪い去られていく。その代り、今ま

で感じたことのない「悔い」や嫉妬を感じるようになる。

麗子は、人生で最も愛した出雲路正吾との関係を思い出す。それは、麗子の人生で最も悔いを感じる関係でもあった。舞台を捨てきれず、結婚に踏み切れない麗子は女優仲間の梅乃に正吾を奪われた。梅乃は、不器量でありながらも「努力型」の人間であり、そこに惚れ込んだ正吾の養母の計らいによって、あっさりとして正吾の妻の座を射止めた。

「美」と「醜」の対立ならば、圧倒的に「美」が強いと誰もが思っている。だが、醜い梅乃に、「人気盛りの美貌を誇りにしていた」麗子は敗北した。さらに、美しさを失いつつある麗子に対して、六十歳を過ぎた梅乃は「不自然なほど若く生き生き」としているという。この梅乃の姿は、美しい人間は醜い人間よりも優位であるという麗子の価値観に揺らぎをもたらす。それと同時に、若さを維持させている梅乃に対して、「一体どんな美容法を実行しているのか」と詮索する麗子からは「若さ」||「美しさ」という価値基準が強調される。

さらに、麗子は梅乃の若さの理由を「若い男にでもあの執っこい情熱を傾けて」いるかもしれないと考える。ここから、若い異性と関係をもつことが、若返りに繋がるという思想が明らかになる。だからこそ、麗子は夏彦を誘惑し、性的な関係を持つように迫る。しかし、夏彦はこれまでの男性たちと違い、「美人っというのはうつつり易いんだね」と「青年の冴えた瞳」で麗子の「老衰」を見ていたはずである。

では、夏彦は一体どのようにして麗子に魅了されて行ったのか。

夏彦には麗子と出会ったことにより、若い女性に対して吐き気を催すような「不思議な変化」が生じていく。また、麗子の肉

体に対しても「時の惨酷な破壊力を感じさせる肉体の衰頹が、麗子から離れた時、逆にもっとも生々しい女性美として感覺される不可思議」に囚われるようになる。信楽に麗子との関係を指摘されれば、「僕は変態じゃない」と答えつつも麗子の肉体を「廢頹の極致の不可思議な醍醐味」と感じ、未練が残る。

このように「不思議」「不可思議」と表現される夏彦の心情から、夏彦が何らかの力によって麗子に導かれていることがうかがえる。これは、後に発表される「遊魂」(『新潮』昭和四十五年一月)や『彩霧』(新潮社 昭和五十一年九月)のなかで確立される「憑霊的な力」の前段階と見做せるのではないだろうか。

まず、「憑霊的な力」がはじめて登場するのは『女面』(講談社昭和三十三年十月)においてである。梅尾三重子を書いた作中論文「野々宮記」では、六条御息所に対して世評とは異なる観点から考察がなされている。なかでも、六条御息所を「男に頼りきらない独立性」を持った人物とした上で、「憑霊的な能力によって、自分の意志を必ず他に伝え、それを遂行させねばやまぬ霊女」と評している。麗子はこの六条御息所の「憑霊的な能力」を継承し、これを駆使して、夏彦の中に入り込み関係を持つに至ったと考えられる。つまり、「憑霊的な力」とは肉体的な魅力を失った高齢女性が若い男性と関係を持つための救済手段として使われていることになる。

「遊魂」以後はさらに幻想性が増し、「自分のうちにくぐもつていて、折々自分に話しかけていた声は、今日、一つの形に凝って、自分のうちからさまよい出て行く」くようになり、相手の男性の「心と身体の奥処にまで自分が沁み通って」行った感覚を残す。「蛇の声」(『海』昭和四十五年四月)においては、さらに自由自在になり、「現実」と「仮現」の境界線は曖昧になり、新聞

記事で読んだ被害者家族の心に同化するまでに至る。

次の疑問は、「憑霊的な力」を駆使し、夏彦と性的な関係を結んだ麗子が実際に回春に至ったのかという点である。

夏彦と交わることによって、麗子の中に残っていた自己憧憬は根こそぎ引きぬかれたと言つてよかつた。麗子は自分一人だけで憎みつづけて来た肉体の衰えの一つ一つの特徴を、この若い用捨のない仕打ちで余すところなくえぐり出されたと思つた。二つの身体がからみ合つて恍惚の境をさまよっている時でも麗子は狂おしく喘ぎ乱れる息の下で、眼の外れに静脈の瑞々しく盛上つた滑らかな夏彦の腕にとりついている自分の腕の微細な皺を畳みこんだ艶のない萎みようを疑いなく見取つて、老婆の犯されているようなみじめさを感じた。(第五章 滝めぐり)

夏彦との関係によって麗子の劣等感は強まり、麗子は「老婆くさを丸だし」にするようになる。なぜ、麗子は精神の均衡を崩し、回春に失敗したのか。ボーヴォワールは次のように指摘する。

女性は性愛において一般に男性よりも自己愛的である。女性においては自己愛は自分の肉体全体を対象とする。彼女は相手の愛撫と視線をとおして自分の肉体が魅力的なものであることを恍惚のうちに自覚する。彼女の相手が彼女を欲望しつづけるならば、彼女は自分の容色の衰えを余裕のある気持ちで甘受する。しかし相手に冷淡なそぶりがみえるやいなや、自分の衰退を感じて心が傷つき、自分の姿を

嫌悪して、他人の前に姿をさらすことに耐えられなくなる。
(シモーヌ・ド・ボーヴォワール 朝吹三吉訳『若い』下巻
人文書院、昭和四十七年六月、原著昭和四十五年)

この指摘は、麗子が精神の均衡を崩す要因を読み解く鍵となるだろう。夏彦は今まで麗子を取り巻いてきた男たちのように、麗子を崇拜しなければ、愛してもいけない。単に「憑霊的な力」によつて麗子に吸い寄せられたに過ぎない。その事実を麗子は夏彦との性行為の中で、まざまざと思い知らされた。

それと同時に、麗子の美意識から麗子の肉体や夏彦との関係は逸脱していた。皺の刻まれた肉体で性行為を行うことに麗子は抵抗を感じている。その背景には恋愛や性交を若い男女の特権と考える価値観が潜んでいる。

たとえば、「狐火」(『群像』昭和四十四年一月)の志緒が「年をとつてものを書くなんて、恋をするのと同じくらい気味悪いことだ」という発言や「遊魂」の「私は息子のような年の男が好きになったつて、何もはずかしがったりする必要はないと思つていなければならない、私の皮膚になつてしまつてい着的物はそれを素直に受け取らない」という発言がある。この発言からわかるように、円地作品の主人公たちは高齢女性が恋愛感情を持つことに嫌悪感を抱いている。倉田容子の言葉を借りれば、「(老女の恋愛はいかなる時代においても「あるべき姿」からの逸脱であり、「美学」に適うものではなかった」ということになるだろう(6)。麗子は自分の美の規範から逸脱した老いた肉体と「年甲斐もない」若い男性との関係の中で、苦しみが増していく。それは、いつしか「夏彦に対する強い憎悪」から「彼を金輪際自分の手から抜け出させまいとする執着」へと変わっていく。

麗子の苦しみの根源は、二つある。まず一つは、麗子自身に潜在する「若さ」と「美しさ」の同一視に端を発している。それゆえ、癌の再発が発覚しても、治療を行うことを拒む。それは、放射線治療によつて、老い衰えて「みじめな姿」を曝したくないためであった。麗子は延命よりも、最期まで「美しい女優」として舞台上に立ち続けることを決める。この決断は、「小町伝説」で語られてきた「醜い形骸を人に蔑まれ、汚なまれながら老い朽ちていった小町の末路に対する反抗である。麗子は、男たちに嘲笑われる末路ではなく、最期まで「憧憬の対象」として生を全うすることを選択した。実際、その最期は老女の小町の扮装を落とし、「前よりも更に美しい幻の小町」の姿に変身した姿であった。また、麗子の「内股」に滲む血は若い女性の象徴であり再生産能力の象徴といえる「月経」とも受け取れる。舞台一筋に生き、「若い美しい役」を演じることにこだわり続けた麗子にとつては、本望ともいえる最期として描かれている。

二つ目の原因は、子宮癌の発生である。まず、子宮癌によつて「子宮を全部めぐり取つてしまった」麗子は、「穴なし」小町との別名を持つ小野小町を演じるように勧められると「一座の者が自分を揶揄している」と感じる。また、執拗に梅乃が子宝に恵まれたことを妬む麗子からは、子宮の喪失が「産む性」からの逸脱を強く感じさせていることが伺える。結婚・出産を女性の成功と見做す時代においては、女優としての成功も麗子の自尊心の支えとはなりきれず、「何とも証明の出来ない脱落感」に苛まれる。

次に、子宮癌と性行為の因果関係が麗子に不安を与えていることも挙げられる。病氣と性交が結びつき、性交に対する不浄感が麗子の中に性に対する倫理的葛藤を生じさせた。そして、

性の享受を妨げることに繋がったとも考えられる。これは、円地の他の作品にも当てはまる。たとえば、「耳環珞」『群像』昭和三十二年四月）の滝子は、癌によって空洞化した子宮の場所を「死口」と呼び、男性との性的関係が子宮癌の再発を促すと恐怖心を抱いている。そのため、夫との接触を避けるようになり、夫の不貞にも見て見ぬふりをする。このように、子宮癌発生後から性に対する意識に変化が生じていることは間違いない。この問題については、円地文学を貫くテーマであるため、今後さらなる検討が必要になるだろう（7）。

結局のところ、麗子の苦悩の因を探ると、自己愛に辿りつく。ナルキッソスは自らに恋し、数々の求愛を拒み、最期は叶わぬ恋に打ちひしがれて自身の胸に刃を刺した。麗子も自身の美しい姿を守るために、命を縮めた。麗子が勝間つねに発した「男を愛するよりも私自身を愛す女なのね」という言葉こそが、「美を病み」、「自己愛」に生きた麗子の本質なのだろう。

三 信楽高見

『小町変相』の男性主人公ともいえる信楽高見は、「狷介な人柄で、無類な醜男」として表現され、内面外面ともに醜く社会性や協調性を欠く人物として設定されている。それゆえ、信楽は一貫して麗子の恋愛対象とは見做されない。また三十年以上に渡り、信楽は麗子を愛しているが、その麗子は現実の麗子とは乖離している。信楽の愛する麗子とは、「麗子を触媒にして」彼自身が作り上げた「幻の麗子」である。

幻の麗子はある時は、母親のようにやさしく僕をかき抱い

てくれたし、ある時には、魔女のように惨酷に僕の首筋を掴んで、きしゃな腕によくあれほど力があると思うほど、僕を鞭打ったり足蹴にしたりした……そうしてその時は麗子に苛まれることにやさしく扱われる以上の歓喜を見出していったのだ。（第四章 渇き）

この引用から、信楽はマゾヒスティクな性的指向を持つと同時に、母性を備えた女性を理想としていることがわかる。しかし、三十年ぶりに二人が再会すると、信楽が長年抱いてきた「この上なく残忍なこの上なく情け深い」「美化」された麗子像は崩壊し、麗子は「普通の女」に変化してしまう。それは、麗子が子宮を喪失したことに起因する。子宮は、女性性の象徴である。また、子どもを育むはずの子宮は、母性に直結するものである。そのため、子宮を喪失した麗子は、信楽の求める女性像から逸脱する。麗子を性的対象として見做せなくなった信楽は、劇作に支障をきたすようになる。

『小町変相』では、「男の性欲は女に比して著しく観念的な誘発をうける」というように「観念」という言葉が繰り返し出でくる。また、信楽は「現実に経験したことと、自分の頭に妄想したこととの間が朦朧としてくる」という。信楽の妄想の中では、麗子は信楽の求めに応じて素直に服を脱ぎ、信楽に体を許す。まさに、信楽の性愛観とは観念的なもので、そこに麗子の人間性は介在しない。その観念の源は、自然や芸術作品であり、生身の女性ではない。信楽が、ブルーフィルムに涙を流し、ストリップに「感興を起すものがない」と不機嫌になるのは、生身の女性の肉体が「観念の上での後宮麗子との歓会を妨げる」からだという。そこで、万葉集の長歌や北斎の「木曾路の奥阿弥陀ヶ滝」か

ら「女と滝、女と水、男にとつては形の定まらないところにある無限の魅力」を見出す。その本物を見るため、夏彦を従えて日光に行き、「湯滝」の「二又に分れた間の岩根に撓やかな若葉の灌木を挿んでいる」姿から、「類い稀な美女の羞恥を伴わない交合の姿体」を連想する。

この本物を見ればきつと、おれも原母の懐ろに帰って、甦ることが出来ると思つたのだ……つまり後宮麗子を女として抱けるという確証を得られると思つたのだよ。(第五章 滝めぐり (夏彦の日記))

この「原母」については、『小町変相』に限らず『彩霧』や「冬の旅」(『新潮』昭和四十六年十一月)でも確認できる言葉である。『彩霧』において、「原母」とは「地に深く根ざし、万物を生み、万物を生きつづけさせる生命の根源で所詮男の勝つことのできないもの」と説明されている。須浪敏子は、この「原母」を「新しい命を吐き出し、また呑みこんで宇宙の無限の命を再生する両性具有的太女神 (Great Goddess) の意で円地が用いていることは、その用例によって明らか」と解釈している(8)。

須浪の指摘に従うならば、信楽は滝に挟まる若木から(新しい生命)の誕生を見た。そして「普通の女」に成り下がった麗子の尊厳を回復させると同時に、性的な欲求の回復も図ろうとした。つまり、円地は、再生産機能を持つ女性の男性に対する優位性を「原母」という言葉に込めている。

その一方で、創作合評『群像』昭和四十年二月)では、この

滝から性器を連想することに対して疑問の声が上がる。平林たい子が、この箇所について「女が書いているものですけれども、これは間違いないですか」と問いかける。それに対して武田泰淳は「日本文学的美と伝統は性器を直視する精神なのであるか、それともそれをやめようとする精神なのであるか」、さらに「ぼく自身の場合を考えてみると、ぼくは女性の性器について直視したいという気持ちと反対の気持ちなのです」と否定的な意見を述べる。

武田の意見に対して、円地は「あられない言葉」(『群像』昭和四十年四月)の中で、男性の性は「著しく観念性が強く、色々な刺激によって、自分の性を補足しようとするのも中年以後の特徴」とし、谷崎潤一郎の「鍵」(『中央公論』昭和三十一年)と「瘋癲老人日記」を例に挙げている。そして、「男は女よりも遙かに多く女の肉体に興味を持っている……そうしてその興味の芯になつているものは性器に対する愛着」だと反論する。

『小町変相』だけでは腑に落ちなかつた信楽の性欲の回復理由が「あられない言葉」を併せ読むことで納得がいくようになる。つまり、「性器を重大視」する男性にとつて、それを連想させる滝の姿から信楽は性的刺激を受けたに過ぎないのではないか。

円地が繰り返す女性の「原母」性と男性の「性器の重大視」という問題は、どちらも円地にとつて重要な理論である。だが、男性の観念の象徴とも言える「原母」を強調しておきながらも、信楽の性欲回復策として、性器を連想させる「二又に分れた」滝を用意している時点で、円地の理論が分裂していると言えるのではないだろうか。

円地は『小町変相』を「女の眼で男といふものを見た」と表現

している。ここに「女の眼」から見た男性の性の限界があるのではないだろうか。

信楽は、自身の醜い容貌に対するコンプレックスと非社会性の反動のように、美人女優に恋をし、麗子の姿から「華麗な幻をゆめみつけ」て生きてきた。しかし、その麗子は信楽によって作り上げられた幻想であった。信楽もまた麗子同様に「美を病む」人間であり、女性を「見られる性」「産む性」という枠組みの中で価値づける男性の代表として描かれている。

四 信楽夫人

信楽が、他者との関係構築に問題を抱えていることは間違いない。それは家庭の中でも同じだったのか。麗子とのスキヤンダルによって北海道に左遷された信楽は、極寒の地で息子を亡くし、妻も肺病になり、家族を失う。信楽夫人は、妻子がいながらも麗子に魅了された信楽を夫扱いしなかった。信楽も、妻が残した「小町私見」に対して「妻はあの文章で、麗子の魅力に魅入られた僕に蠟螂の斧をふるって」というように、妻の自分に対する恨みを感じている。それゆえ、信楽の妄想には「捻挫した足首と罅の入った腰骨」に、死んだ妻が「床の横に坐って痛む骨を撓め」といった残酷な人物として現れる。

また、夏彦の想像する信楽夫人も「彼女は吐く息も臭く、痩せかかれていたが眼に紫の光が宿って凄まじく輝いていた」ように映る。つまり、信楽夫人の姿は怨念を抱えた女性として男性の目には映っている。また、須浪は「小町私見」について「家を守り子を育てる平凡な主婦であった信楽夫人は、『女は結婚し子を産み育てるもの』との通俗哲学で麗子を裁いている」とし、

「怨念と恥のあなたの愛を信じられない夫人は、また、女の美しさについても、若さ（生物的盛り）以上のものを想像できる人ではない」と信楽夫人を「凡庸」「芸術を解さない」人物として非難している。果たして、本当に信楽夫人とは「怨念」にまみれた、「凡庸」な人物だったのか。ここでは、信楽夫人の人物像について考察していく。

まず、「小町私見」の筆者は誰なのか、ここで改めて定義したい。たとえば、須浪は「信楽の多少の加筆」を認めつつ、大筋は「信楽の妻が書き残したもの」と定義する。一方、野口裕子は、「私見」の筆者は信楽高見でなければならぬ」とし、「合作」であるとしても、それは限りなく信楽作に近い「合作」なのである」と定義している（9）。

しかし、テクストを辿ると、夏彦が「私見」の文章を「ちよつとてにをはの合わないところがある」と指摘しているため、国文学者の信楽が書いたものとは考えにくい。また、「お終いのところは僕が書き加えたのだ」という信楽の言葉からも、本稿において未尾のみを信楽による加筆とし、それ以外は夫人が書き記したものとす。

信楽夫人は、「小町私見」を執筆するにあたり「史料」に拠るのではなく、「小町歌集」の中の歌から「自分流」に想像したという。つまり、この「私見」には夫人の価値観が多く含まれていると考えられる。また、夫人が小野小町に麗子を、伝説を形成した男たちに信楽高見を重ねていることは間違いない。だが、夫人によれば「小野小町」には、「言い寄る男を歌で誑かしながら、実際には身近く寄せつけないというような驕慢な猛々しさはどこにも窺えない」と指摘する。そのため、後世に語られる小町伝説は「受身な守勢を保ち続けることの中でのみ女の美を発見し

ようとする時代になって、小町を好色とか驕慢とか呼んで憎悪する感情に変わって行った」という推測に至る。さらに、夫人の主張は「男の内には女に対する無限な恐怖心が潜在している」が「それは女が家婦となることによつて、その通力を失つたような錯覚を持つ」という。

注目すべきは「あなめ伝説」について、「僧の手で薄一本を引きぬいて貰つたことで成仏するという終結自体さえ、小町にとつては言いようのない侮辱ではないだろうか」と小町を擁護する見解を示している点である。これには、夏彦が「小町にどうしてあれほど思いやりのある言葉が述べられたのか」と疑問に思うほどである。つまり、夫人は小町に対して同情的なまなざしを向けていることになる。これは、夫人が小町伝説を通して美貌の女性の不幸な側面と美貌の女性への男性の一方的な恋慕及び憎悪が普遍的なものであることに気付いたからだと考えられる。それゆえ、夫人は麗子に対しても同情的な立場を示し、一方的に好意を寄せる信楽側に原因があるとの考えに至つた。そのため、須浪の「麗子を裁いている」という指摘は当てはまらないと考へる。

さらに夫人は、小野小町の内面に目を向けず、男たちが自己の内なる幻想の小町像を作り上げていることを問題視している。そして、それは小町に限らず「家婦」となった女性たちの苦しみにも通じる。手に入らない美女を追い求め、最終的には憎悪という感情を傾ける男性たちの背後には、決して男性にとつて「人生で最高、最美の対象」とならない女性たちがいる。小町の美女が「男のつくり出した残酷物語の女主人公」として君臨し続けるのに対して、「家婦」となり「通力」を失つた女たちは注目されることもなく男性の影になり生きていくことになる。つまり、

夫人の「私見」からは未婚・既婚を問わず男性に苦しみられる女性全般に対する憐みが感じられる。

ではなぜ、夫人は小町に愛着を示し、たった一人で小町にゆかりのある地へ足を運んだのか。それは、信楽が「私見」の最後に書き記したように、夫人が「不毛」な人物だからではない。夫人は、伝説を形成した男たちの心理を分析することを通して、麗子に魅入られた夫の心情を理解しようとしたのではないか。「私見」に「私は文献の研究をしたわけではないから、正確なこととは世の識者の教えを俟つ」と夫人は記している。「世の識者」であるはずの夫に、夫人は尋ねることができなかった。それは、夫婦関係が破綻していたからであろう。それでもなお、夫が情熱を傾ける国文学と麗子という小町的な美女を探求することによつて、不義理な夫を少しでも理解しようとしたと考へることにはできないだろうか。

夫人は、「私見」で「女の性の中に深く爪を食いこませた男の憎しみと悲しみを同時に味わう思いがする」と記した。自分を裏切つた夫の心の中に潜む「悲しみ」に思いを馳せる夫人は、信楽や夏彦が想像するような「怨念」だけを抱えた女性だつたとは考へにくい。『小町変相』において、麗子も信楽も他者の内面を思いやるといふ視点が完全に欠落している。また、自己の内面についても、自分自身で語ることが全くない。麗子にはつね、信楽には夏彦という解説者を通してしか、読者は両者の内面を窺い知ることが出来ない。そのような登場人物のなかで、信楽夫人こそ他者の内面を理解しようとして試みた唯一の人物だつたのではないだろうか。夫人は、小野小町という伝説の人物を通して、美貌の女性とそれを追う男性の心理に迫り、心を通わせることが出来なかつた夫の心情さえもくみ取ろうとした

のだろう。

おわりに

以上見てきたように、『小町変相』は円地の「老女もの」の中でも特異な設定である。それゆえに、加齢と容貌の衰退という女性特有の老いの問題を浮き彫りにし、それに伴う高齢女性の性愛観を赤裸々に描くことを可能にした。麗子の苦しみの背景には「若さ」＝「美しさ」という価値基準があり、美しさの維持には男性の存在が不可欠という価値観が存在していた。麗子の価値観の裏には、男性が求める理想的な女性像の内化がある。麗子は常に、男性的な観点から自己評価を行い「見られる性」「産む性」としての自己であり続けることを望む。それゆえに、老いとともに失われる美貌と生殖能力の消滅という現実を乗り越えることができない。それだけでなく、女優として成功を収めても、なお妻・母というジェンダー的役割に就かずに生きて来たことに悔いを感じる。信楽は、まさに麗子を「理想の女性」という枠組みで縛り付ける異性の象徴として存在しているといえるだろう。

女性は加齢とともに男性を惹きつける肉体的魅力が減少していく。それでも異性を求める気持ちに変わりはない。そこで、円地はセクシュアリティの問題に直面した高齢女性への救済手段として「憑霊的な力」を与え、高齢になってもなお男性を魅了する力を主人公に授けた。この「憑霊的な力」は、後の「老女もの」にも重要なアイテムとして継承され、円地は次々と高齢女性のセクシュアリティに焦点を当てた作品を描いていくことになる。つまり、『小町変相』は一連の「老女もの」の端緒とも位置付け

られるだろう。

また、『小町変相』の優れた点といえば「小野小町」の伝説と麗子の人生を重ね合わせることによって、美貌の女性の光と影が普遍的なものであることを明らかにしている点にある。そして、信楽夫人という存在を通して美に囚われた男女の悲哀を客観的に明らかにしたことも、作品により深みを与えることになっている。

『女坂』（角川書店 昭和三二年三月）を代表作とする円地は、「家長制」という枠組みの中で抑圧される女性を描いてきた。『小町変相』においては、「見られる性」「産む性」という枠組みを設けることによって、女性への抑圧の一形態を明らかにした。つまり、この作品の読解を通して、円地が繰り返し描いてきた女性への抑圧が、家庭という狭い範囲から社会という広範囲に拡大されていることに気付く。円地は終生変わらず、女性の生き方に問題意識を持ち、それを抉り出すことに人生を賭けてきたことが伺える。

冒頭で触れた男性作家達が描く老いの苦しみと、円地が描く女性の老いの苦しみには大きな違いがある。「老い」という現象に対する男女差は今後も考察すべき課題である。

【注】

(1)

細川涼一「小野小町説話の展開」(『女の中世』日本エディタースクール出版部 平成元年八月)。

(2)

ゆのまえ知子「『老女』のセクシュアリティ——トーマス・マン『欺かれた女』と円地文子『小町変相』」(樋口恵子編『エイジズム おばあさんの逆襲』(ニユー・フェミニズム・レビュー vol.4)学陽書房 平成四年十二月)

(3)

有元伸子「小町変奏——近代文学にみる小野小町像の継承と展開」(山根巴・横山邦治編『近代文学の形成と展開』和泉書院 平成十年二月)

(4)

須浪敏子『円地文子論』(おうふう 平成十年九月)

(5)

東畑開人『美と深層心理学』(京都大学学術出版会 平成二十四年六月)

(6)

倉田容子『語る老女 語られる老女——日本近現代文学にみる女の老い』(学藝書林 平成二十二年二月)

(7)

日本性教育協会編『がん患者・家族のセクシュアリティ』(性科学ハンドブック vol.10 日本性教育協会 平成十七年六月)によれば、婦人科系癌再発後に患者から「セックスすると女性ホルモンが活発になって、自分のがんが悪くなるのではないか」という心配の声を聞くことがあると、癌研究会有明病院の医師伊藤良則氏が述べている。また、癌治療後には心理的・身体的の両面から様々な変化が生じるといふ。つまり、医学的な側面からも、検証が必要な課題であるため、今後詳しく検証していきたい。

(8) (4)と同じ。

(9) 野口裕子『円地文子の軌跡』(和泉書院 平成十五年七月)。

※本稿における円地文子テクストの引用は、全て『円地文子全集』(新潮社)に拠った。

Fumiko Enchi “Komachihenso”: A Study about the Life of “Beautiful Women”

AKAGI Tomomi

In modern Japanese literature, the issue of “aging and sexuality” has been depicted in the genre of “Rōjinbungaku” (literature written by, and concerning, senior people). Fumiko Enchi, one of the most prominent female writers in Japan, addressed this issue head-on. Enchi left a number of completed works which are called “Rōjyomono” (literary works describing old women). Among these works is *Komachihenso*. This novel is based on the legend of Ononokomachi (a beautiful female waka poet), and is characteristic in the sense that the main character of the story is a beautiful woman named Reiko Ushirogu, an actress who remained unmarried all her life.

First of all, this study focused on the suffering caused by the beautiful appearance of the women in this novel (Reiko, and other characters). It aimed to analyze the background of such a suffering. From this study, I found some potential leads which could be regarded as some of the causes of their suffering. For example, masculine way of thinking, such as the tendency to regard “youth” as an absolute requirement for “beauty”, could be internalized in women’s minds. It could be this internalization that leads them to stressful situations. Another lead could be the repression from the people who look at women as “the sex to be seen” or “the childbearing sex”. This study also revealed that the main character, Reiko, is relying on spiritual power to overcome the problem of physical decline, as well as to fulfill her sexual desires.

Moreover, in this study, I pointed out the importance of Mrs. Shigaraki, one of the characters in this novel. This character had not been focused on in previous studies. In “Komachishiken”, an essay about Ononokomachi which is written by Mrs. Shigaraki herself, she analyzed the sorrows of beautiful women, as well as the mentality of men who cannot help but to seek beautiful women. As a result of her analysis, she came to feel a kind of sympathy for Reiko and Mr. Shigaraki (her own husband), even though they had both committed infidelity. If we take into account this conclusion that she comes to, I put forward the idea that her existence enabled to describe the personality of Reiko and Mr. Shigaraki in a more in-depth fashion.

Keywords: Ononokomachi, aging, sexuality